

【セッション3 コメント】

鉦山町で質的調査をする意義と可能性

好井 裕明（日本大学文理学部）

本セッションにおいて、イギリスでの炭鉱の歴史や炭鉱博物館の現状をうかがい、また炭鉱という労働や日常の暮らしを描きとった優れた印象深いドキュメンタリーをみて、いろいろと考えることができました。コメントの時間は限られていますが、単に報告に対する感想や問いかけという形ではなく、あらためて、なぜ私たちが炭鉱や銅山など鉦山町で生活史（生活誌）聞き取りという質的な社会的調査研究を行いたいと考えるのかという問いについて、まとめてみたいと思います。

まず第一に、それは炭鉱や鉦山で生きてきた人々一人ひとりの「生きられた歴史」「生きられた記憶」「生活の知恵」「地域への思い」などの語りと出会うためなのです。炭鉱や鉦山をめぐる客観的資料は、とても重要なデータです。ただ客観的な数字だけでは想像できない人間の労働や暮らしが炭鉱にはあります。それを調べるうえで、質的な聞き取り調査を重ねる作業は必須なのです。それは個人の主観的記憶とできるだけ多く出会い、そこで語られる「生きられた知」「生活の知恵」を記録し、炭鉱や鉦山が栄え、時代の変遷のなかで衰退していったという歴史を「人々の語り」から裏打ちしていく作業であるともいえるでしょう。

第二に、炭鉱や鉦山で生きてきた人々へ聞き取り調査をするとき、何を聞き取りたいかを考えることが重要です。それは研究する側の問題関心によって異なりますが、どれがより重要かという定まった基準などないと私は考えています。たとえば、炭鉱や鉦山での坑内労働の実際、労働運動などをめぐる語りを収集し整理すれば、炭鉱史・鉦山史・石炭産業史・労働運動史となりますし、さらに炭鉱町、鉦山町での日常、社宅での暮らし、鉦山の世界以外の人々との交流などに焦点をあてて語りを整理していけば、独自の炭鉱地域史・鉦山町の歴史へつながっていくでしょう。

また、普段の買い物や家事、社宅での近所づきあいなど、より細かい日常の暮らしのありよう、祭りや娯楽などの非日常の文化の実際に分け入って聞き取りを深めれば、地域で生きる人々の生活文化誌へ結実していくのです。

また鉦山関連組織の詳細（たとえば生協組織）を聞き取ることで、地域で生きる人々の生活がどのように編成されており、そこにどのような問題が息づいていたのかを読み解くことが可能となるし、鉦山町の教育の詳細（たとえば地元の学校教育と鉦山労働との関連など）を聞き取ることで、鉦山と密接に関連する地域教育史、固有の教育問題を描き出すことができるのです。もちろん、従来から行われてきた地域特有の公害など社会問題をめぐり、まとめ直すこともできるのです。

第三に、こうした多様で厚重的聞き取りの成果をどのように還元することができるのかも考えるべき作業です。報告で象徴されるように優れたドキュメンタリーなど映像作品を制作し、多くの人々に炭鉱をめぐる歴史的事実と現在を印象深く伝えることもできるでしょう。語りをまとめた報告集、語りをもとにした小説など文芸作品も可能だし、語りのアーカイブ化、歴史資料館の創設も必須なのです。啓発という側面を考えれば、よりわかりやすい語りのデータをもとにした分析論集や地域の人々へ返すために工夫された読みやすい冊子などもぜひ作るべきなのです。

第四に、そして炭鉱町や鉦山町などで生活者に聞き取り調査をする最大の意味とは、そこで生きてきた人々の記憶や知恵を研究者が、わかりやすくまとめ、時代や状況との関連で知恵や記憶がもつ意味を分析し、その成果



を学術論文にまとめるだけでなく、より分かりやすい形で内容を整理し、当該地域の人々へ還元することなのです。

地域の人々は、同じ場所で生きてきた人の記憶や語りを参照し、自らの記憶や知恵と照らし合わせるでしょう。そこにはそれぞれの主観的な記憶や知恵の差異が生じていくのですが、そうした差異を人々が気づき、さらに語り合う営みこそ、大切であり、その営みが地域で行われ続けるなかで初めて「生きられた地域生活の歴史」が着実に生み出されていく可能性が開けていくのです。